

京都府教育委員会教育長賞

非行防止教室で教わったこと

宮津市立府中小学校 五年 谷口 理奈

私は、非行防止教室で教えてもらったいいじめについて考えました。いじめは、ダメなことです。いじめている人もいじめを知らんぷりしている人も、見て見ぬふりをしている人もいじめをしている人と同じになると聞いて、「それはそつだ。どうして助けてあげないの」と思いました。知らんぷりしている人は、その行動がいじめていることになるという感覚がないのだと思います。相手がその行動でも悲しい気持ちになっていることを知ってほしいです。一人ぼっちがつらいことを知ってほしいです。悲しいとき、だれも助けてくれる人がいないのは、本当につらいです。非行防止教室の話では、生きているのがつらいくらいになる人もいると教えてもらいました。

私は、転校をしたことがあります。友だちができるまでは、どきどきするし、一人ぼっちでつらいです。声をかけてくれる友だちがいたら、どんなにうれしい気持ちになるか。みんなに知ってもらいたいんです。そばにいてくれるだけで、どんなに心強いかわ教えてあげたいです。

ここに転校してきたとき、できるだけ人にめいわくをかけないようにとしやべらずに静かに過ごしていました。でも、それでは一人ぼっちのようでした。さみしい気持ちになっていたけど、そんな私のそばに友だちがきてくれました。特に何をしゃべるわけではないけど、一緒にいてくれるだけでほっとしました。そうするうちに遊ぶようになって、そして、毎日毎日一緒に遊びました。テストの点数が悪かったときには、

「次があるじゃん。」

と言ってはげましてくれました。友だちがいてくれることはとても

心強いです。

人をいじめてしまう人も、きつと本当はさびしい気持ちがあるんじゃないかと思いました。きつと何か理由があるんだろうと思っています。自分から声をかけたり、何かを伝えたりしていったら、いじめてしまう人にも何か変化が起るかもしれないと思いました。

私は、絶対にいじめなんかしたくないし、されたくもないです。そして、いじめている人もいじめられている人も見たくないです。いつまでも友だちとなかよくしたいし、たくさん遊びたいです。心がすれちがって、なかよくできないときがあっても、声をかけて自分からおしゃべりしたいです。本当は、自分から声をかけるのは勇気がいるし、できそつにないと思ってしまうけど、校長先生が、「ちよつとの勇気を出してみよう。チャレンジしてみよう。」とおつしゃっていました。自分ができないことにチャレンジすることはいいいことだと思つので、私はこのことにチャレンジしてみたいと思いました。今は、自分から声をかけるようにしています。私のチャレンジで、楽しい学校を創ることができたらうれしいです。みんなが楽しく勉強できる学校にしてみたいです。みんながやさしくて、笑顔がいつぱいの学校にしたいです。

非行防止教室の学習で、自分の新しいチャレンジを見付けた気がします。

審査員からのメッセージ

非行防止教室で学んだこと、考えたことがわかりやすく表現されています。経験を通して気づいた友だちへの感謝と、やさしく笑顔いつぱいの学校にしていきたい前向きな気持ちが伝わります。



京都府教育委員会教育長賞 犯罪をなくすために

京丹後市立網野中学校 二年 井上 早優

最近の日本は殺人事件や強盗事件、放火事件の他にもいじめや殺人など、日本各地が犯罪のニュースであふれています。

私は、父の影響でよくニュースを見たり、新聞を読んだりします。朝はテレビでニュースと天気予報を見て学校にいく、これが私の家の朝のルーティーンです。ゾッとするような怖い事件もあれば、ほっこりするおめでたい報告もあります。そして、犯罪のニュースが流れてきた時に私はいつも、どうして人は犯罪を犯してしまうのだらうと思います。

どうして同じ人間なのに、その同じ人間を殺してしまうのだらうと思います。どうして暴力をふるうのだらうと思います。そして同時に、事件を起こしてしまった人の家族や友人はどんなことを思っているのだらうと思います。人が犯罪を犯してしまう理由は、寂しさや孤独感があるからだとは私には考えられません。なぜなら孤独感とは他者との十分なつながりが足りず、寂しさ、虚しさ、疎外感、不安感など様々な感情を伴うからです。

では、孤独感を抱いている人を減らすにはどうすればよいのでしょうか。他者とのつながりが十分にあり、寂しい思いを感じさせない環境をつくれればいいのです。しかしそれは、そんなに簡単なことではありません。だから家族との関係がすごく大切だと、私は思うのです。当たり前のように一緒に過ごしているけど、家族は信頼し合えて、理解してくれて、一番の味方になってくれる存在だからです。

私の両親は共働きで、いつも帰りが遅いです。私は、三人兄妹で兄と姉がいますが、歳が少し離れています。私が小学校高学年になっ

た頃からは、「学校から帰ると家には私一人」が当たり前でした。他の友だちは家に帰っても兄弟がいたり、お父さんやお母さんがいたりして、とてもうらやましかったのを覚えています。でも、ある日突然兄が学校に行けなくなりました。父と母は、何とか学校に行かせようと毎日毎日ベッドから兄を引きずり起こしていました。それでも兄は学校に行けませんでした。だから、私が学校から家に帰ると兄がいる。私は小さい頃から兄が大好きだったので、すごく嬉しかったです。両親はすごく悩んだ数年だったと思うけれど、私はすごく楽しかった数年でした。そこで私は、家族が一人居るか居ないかでこんなに違うのかと、家族の存在の大きさに気づかされました。兄が学校に行けなくなる前は、寂しくてたまらなかったけど、兄が学校に行けなくなった後は、寂しいと感じたことは一度もありませんでした。今は、大学に進学して元気に過ごしている兄ですが、そんな兄のおかげで、「家族はかけがえのない存在だ」ということに改めて気づくことができました。兄には本当に感謝しています。

非行に走ってしまった人の周りにも、もし話を聞いてあげられる誰かがいたら、事件は起きなかったのだと思います。味方になってくれる家族や友人がいて、生活していける場所があると孤独を感じる人が減り、犯罪や非行が少なくなり、明るい社会が創られていくと思うのです。

審査員からのメッセージ

自分自身の問いをもとに、経験を振り返りながら、わかりやすく考えを表現されています。人と人とのつながりの大切さと家族への深い感謝が文章全体から伝わり、明るい社会への想いと希望にあふれています。